慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	信用論史におけるマルクス : 流通論批判と信用論
Sub Title	Marx and the classical theory of credit
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1986
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.79, No.2 (1986. 6) ,p.166(36)- 182(52)
JaLC DOI	10.14991/001.19860601-0036
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19860601-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

信用論史におけるマルクス

——流通論批判と信用論——

飯田裕康

1. 開　題

A．スミスが『諸国民の富』(1776年) において，資本の社会的総再生産過程の問題を提起したとき，その学説史上の特徴の1つは，スミスが，再生産過程と貨幣流通の関連に，当該問題の重要性を見い出したことであった。このような視角は，明示的でないにせよ，スミスにスチュアートの「流通論」とはことなった「資本の流通過程」論の構築の課題を与えたことになり，それとの連関において，貨幣流通，資本流通，そして「金融流通」という三重の流通構造を，再生産論の一環として説くことを必要ならしめた。(1) これにたいするスミスの対応 (回答) は，『諸国民の富』第2篇第2章 (Book II, Chap. 2)「社会の総資財の特殊部門と考えられる貨幣について，すなわち，国民資本の維持費について」および第4章「利子付きで貸付けられる資財について」において為された。

スミスの当該諸章での問題意識は，いわゆる「金融流通」や貨幣流通が，資財 (Capital Stock) ＝現実資本の蓄積の妨げとなっている現実に対して，それと現実資本の蓄積との本質的差異を明確に示すこと，それによって生産的諸資本の再生産過程としての流通と，貨幣流通の意義の違いを示すことであった。さらにこのことは，また，「金融流通」の形成・展開に帰着せねばならない資本の流通過程の個有の Proplematik を呈示しえていたのである。これら諸課題を解き明かすスミスの理論装置は，当該第2章に導入された，いわゆる流通領域の二分論，すなわち資本主義的商品流通を商人と商人との間の取引と，商人と消費者の間の取引とに二分割する視角であった。(2) これによって，貨幣流通 (スミスに即してみれば流通手段としての貨幣の流通) の流通過程にたいする規定的意義が解明された。それのみならず，スミス以後の「流通論」の展開に決定的に作用することなった問題，貨幣と資本との区別問題が，ここに呈示されたのである。このことは，言うまでもなく，貨

注 (1) このような視角からする，スミス信用論の分析は，これまでほとんどなされてきていない。当面，拙稿「A・スミスにおける資本蓄積と信用」「三田学会雑誌」75巻特別号，1983年を参照されたい。なお，金融流通なる概念は，ここでは，再生産過程から自立した貸付可能貨幣資本の独自の流通部面を含意している。

(2) スミスの流通二分論の信用論史上の意義にかんしては，トゥークが『通貨原理の研究』においてあきらかにしている。解釈史のうえで，トゥークはこれを実質的に再生産論的に把握したといってよいであろう。前掲拙稿を参照。

幣を専ら「資本」の視角において把握しようとする重商主義的流通観にたいする批判でもあった。

「流通論」におけるスミスの基本視座は，貨幣流通，資本の流通，「金融流通」を論理的に区分すると同時に，それらを構造的に関連するものとして捉え直さねばならないということであったが，スミス以後のこの分野の展開は，「流通論」として体系的に展開されるものをもたなかった。しかし他方で，18世紀末から19世紀中葉の資本主義経済の展開の諸現象，とくに経済恐慌の発生と産業社会の循環的運動に関連して，この問題は時論的に多くの論者によって取り上げられて，論点が深められていった。イギリスにおける地金論争，通貨論争の展開がまさにこの深化の過程を代表するものであることは言うまでもない。マルクスをして，スミス以後の古典経済学の見る可き成果として高い評価を為さしめたものこそ，この過程であった。しかし，それにもかかわらず，「流通論」は古典経済学やその亜流によって，ついに完成を見ることはなかった。そしてその完成——まさにスミスによる問題提示を踏まえた完成——は，カール・マルクスを待たねばならなかったし，かれにおいて初めて体系的な形を与えられたのである。

小稿は，マルクスによる「流通論」の体系的構成を上述したような学説史的展開を考慮に入れつつ信用論の展開に即して跡付けようとする試みである。とくに，「金融流通」の独自性の認識と，「資本の流通過程」論の展開とが，いかに絡み合いつつ為されたのかを明らかにして，マルクス信用論——当面の対象は現行『資本論』第3部第5篇に結実するそれ——と，古典経済学，とくにスミス以降の信用論との差異を明らかにしようとするものである。(3)

2. 信用論の基本的課題と基本構成

〔1〕 スミス以後の古典経済学の信用論の問題を一括的に表出することは，それ自体きわめて困難な作業であるが，スミスによって主張され，以後信用論の発展を支えた観点の一つは〈貨幣の節約〉であった。無論，この節約の内容も一義的ではなく，資本主義的流通の複雑さをも反映して，多様に理解される内容となっていく。そのさい，金の節約とそれにともなう通貨（Currency）価値の安定性とに，すなわち通貨流通の安定性の保持の問題に，分配問題への論点移行を踏まえてますます重点が移されたことは争えないところであろう。他方，節約の対照点としての通貨の資本的用途にかかわる問題，すなわち，通貨流通量と利子率との関連も大きな論点をなした。古典経済学の流通論は，この2つの論点を明確に統一的に把握することについに成功しなかった。マルクス信用論の個有の課題設定は，まさしくこの点の鋭い確認に由来し，しかも，この点の深化と，克服とを企てるのである。マルクス自身は，これについて，現行『資本論』第3部第5篇第30章冒頭において，つぎのように述べて，自己の課題を明白に提示している。

注（3） 小稿の内容の一部は，同一標題のもとで，経済学史学会関東部会（1985年6月16日於慶大）において報告された。

「信用制度にかんしてこれからわれわれが近づいてゆく無類に困難な問題は，次のような問題である。

第1に，本来の貨幣資本の蓄積。これはどの程度まで現実の資本蓄積の，すなわち拡大された規模での再生産の，指標であるのか，またどの程度までそうでないのか。いわゆる資本の過多，いつでもただ利子生み資本すなわち貨幣資本だけに用いられるこの表現は，ただ，産業上の過剰生産の特殊な表現の仕方でしかないのか，それとも，それとは別に一つの特別な現象をなしているのか。貨幣資本のこの過多，この過剰供給は，停滞している貨幣量（地金，金貨幣，銀行券）の現存と一致しており，したがって，この現実の貨幣の過剰は，あの貸付資本の過多の表現であり現象形態であるのか。

そして，第2に，貨幣逼迫すなわち貸付資本の欠乏は，どの程度まで現実資本（商品資本と生産資本）の欠乏を表わしているのか。それは，他方，どの程度まで貨幣そのものの欠乏，流通手段の欠乏と一致するのか。[4]」

ここに示されている問題は，まさに「本来の貨幣資本」の蓄積が，①現実資本の蓄積といかに関連しているか。②貨幣資本の蓄積は，貨幣そのものの量（流通量）と連繋しているのかどうか，ということに帰着しよう。したがって，ここでは「本来の貨幣資本」と貨幣との明確な区別基準の措定が併せて求められている。こうした点から信用制度と通貨制度の内的連関を解き明かすことも，基本的に問題として提起されている。これがなぜ「無類に困難な問題」であるのか。

マルクスはこのような自らへの課題設定を為すに当って，その前提として，再生産過程における「貨幣」，「貨幣資本」の区別の問題を先行する第28章で取り扱った。そして，トゥークやフラートン，ウイルソンなど銀行主義者といわれる論者たちの通貨と資本の区別への努力が，結局は，「収入の貨幣形態と資本の貨幣形態との区別[5]」さらに「収入の流通としての流通と資本の流通としての流通との区別」に帰することがあきらかにされる。重要なことは，貨幣と資本の区別は流通領域の区別であり，それはたんに二分されるのではなく，資本の流通が，本来の，貨幣資本の流通領域をも包括することが，Geldkapital と monied capital との区別からあきらかにされてゆくのである。[6] ここにもすでに古典経済学の信用論＝流通論を止揚する視座が明示されている。そればかりでなく，信用論の基本課題が，このような「流通」分析の中から措定されてくることが確認されていることが，さらに重要な点であろう。マルクスは，同じ篇の第27章においては，これを「信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察する[7]」ことだと位置づけている。

注（4） Marx, K., Das Kapital, in: Marx Engels Werke Bd. 25 S. 493（以下 MEW 25, 493 のように略記する。）

（5） MEW 25, 459.

（6） monied capital は古典経済学の対象の一つをなした monied interest に対応する概念であるが，マルクスは，これを再生産過程からの自立性を基準として特定している。

（7） MEW 25, 457.

〔2〕 利子生み資本は，再生産過程から自立する貨幣（貨幣資本）の運動形態の総称である。いま利子生み資本となるべき貨幣や貨幣資本の由来を問題にしないとすると，ここでは，共通の運動様式＝流通様式をもつものとしての一様なる資本，階級共同の資本が問題なのである。そうした資本は，個別資本の運動形態$G—W\left\{\begin{matrix}Pm\\A\end{matrix}\right.\cdots P\cdots W'-G'$における$G$ともことなり，その本質において独自な集積過程をもった社会的資本として表われる。しかし，こうした資本のこの独自な現象形態の運動契機は，「貸付」すなわち，貨幣債権の形成によって与えられ，これによって現実資本の運動＝再生産過程に一定の有機的関連を保持しうる。すなわち，信用関係こそが，この資本の運動基盤をなしている。資本家社会のあらゆる関係は，ここでは，利子生み資本をめぐる社会関係に収斂されている。

こうした，利子生み資本の独自性は，さらに，資本主義的信用の基礎的形態である商業信用との関連をつうじてもあきらかにされる。

銀行信用から区別された，純粋な商業信用を対象とする。このような限定のもとで，そこでは，信用の当事者は，再生産過程に関与している商人であり生産者である。この信用は一方で信用を与え，他方で信用を受ける関係を特徴としている。だが，この「相互の債権の決済」[8]は，資本の還流にかかっているし，還流が遅滞したときには現金支払が求められるから，商業信用においては，「債務を履行するために処分できる予備資本」[9]の蓄蔵が不可欠である。だから，「この信用制度は，現金支払の必要をなくしてしまうものではない」[10]。商業信用は，資本の再生産にとって最も基本的信用形態ではあるが，それは資本還流そのものによって限界が画されている[11]。この限界を突破しようとすれば，必然的に諸個別資本の枠を超えた資本の利用に向かわざるを得ないことになる。このことは，信用関係に即してみれば，各個別資本の循環に規定される商業信用の期限は，長期化せねばならず，それにつれて，思惑的要素も強められることを意味する。換言すると，この関係は，商業信用の基盤である個別資本の現金準備を個別的枠から解放しうるより展開された関係に移行せねばならなくなることを意味している。ここから論理的には，はじめて利子生み資本が問題となる。したがって，純粋な商業信用は，利子生み資本としての貸付可能資本の社会的蓄積には直接的に関与していないといってよいであろう。マルクスは，商業信用のこの限界が，「この商業信用に本来の貨幣信用が加わる」[12]ことによって，克服されると考えたのである。

注（8） a. a. O., 496.
（9） a. a. O., 497.
（10） a. a. O., 497.
（11） ここでの還流を，金融流通を前提に加味して考察する，すなわち，「純粋な商業信用の純粋性をはずして考察すると，それは，マルクスが，1850年代の『ロンドン・ノート』で関心を集中した問題の一つを想起させる。これについては後述。
（12） MEW 25, 501.

〔3〕 貨幣資本（monied capital）の蓄積と利子生み資本の運動には，いまひとつ大きな特徴がある。マルクスが強調しているように，貨幣資本の蓄積が，生産的資本の蓄積の度合いを直接的に反映するものではないことを想起しなければならない。貨幣資本として貸付可能資本をなすものは，休息貨幣もあれば，労賃部分もあり，無論，減価償却部分（積立金）もあるであろう。しかし，これらが独自の流通領域を形成することが問題なのである。この流通を規定するものは，利子率であり，このことが，たんなる貨幣流通次元の問題と，この流通とを大きく隔てるのである。マルクスが，貨幣資本のうちに fictive なもの――本来の擬制資本を含めて――を含めて考えるのも，それらが，利子率を前提としてのみ「資本」たりうるからなのである。

かくして，マルクス信用論が明らかにしようとしたものは，貨幣資本の蓄積を利子率の変動の主要要因としてあきらかにし，信用関係が fictive なものの形成によって，再生産過程にたいする自立性を拡大してゆくことをあきらかにしたものだと言ってよいであろう。

上記のような諸点を，マルクスは現行『資本論』において信用論としてつぎのように構成したといってよいであろう。

まず，産業資本・商業資本に対して，利子生み資本なる範疇規定を明確にすることによって，資本主義的再生産を前提にすると，貨幣が同時に貨幣資本であることと，それが競争の基盤たる個別諸資本の関係とはことなって，大量的な共同的資本であることを示す。

さらに，このような共同的資本が銀行資本を形成し，そのもとに銀行信用を展開することによって fictive な資本の形成に帰結し，いわゆる信用そのものの利子生み資本化をもたらすことが明らかにされる。

信用の利子生み資本化によってもたらされる事態は，一定価値額の貨幣を実体とする利子生み資本に新たな形態の利子生み資本が加わることを意味している。これはたんに利子生み資本の形態が多様化するだけでなく，monied capital そのものが新たに創出されることを意味する。信用の利子生み資本化の問題は，この monied capital が monied capital の諸種差において相互にいかなる関係にあるかを，あきらかにすることである。マルクスは，信用論の展開過程において，この論点についてつねに一貫した問題意識をもっていた。具体的には「金融市場」にかんするプランの中で明確にされている。また，本来の貨幣資本から fictive な貨幣資本への転化と層化を基礎とした金融流通の構造的な組成としても，これを説こうとしていたといってよいであろう。そしてここに信用関係の再生産過程からの独自性が示されているだけでなく，商業信用の限界の克服の信用制度固有の方向もまた示唆されているのである。(13)

信用制度における fictive まものの展開は，商業信用関係を前提とした「通貨流通」とは異なった通貨流通の展開を示唆するものであり，銀行信用を基本的契機とするmonied capital の蓄積と

注（13） 以上の諸点については，拙稿「マルクス信用論の基本構造」「金融学会報告」66号，1985年を参照されたい。

一体化した通貨流通なる観点を提示したのである。換言すれば，これは金融流通としての通貨流通ということになるであろう。この論点の解明のためにマルクスは動態的な再生産過程の展開をあらたに前提とせざるをえなかった。いな，19世紀中葉のイギリス資本主義がまさしくそのような様相を示していたのである。

しかしこのことは，流通論史の一環としては，きわめて重要な問題を提起したのであって，スミスにおいて「金融社会」(moneyed interest) として批判的に言及されていたことを，資本の流通領域の必然的な展開部面として示すことになった。

マルクスの信用論構成上の重要な観点の一つは，マルクス自身が「近代的信用制度の軸点」として規定した中央銀行の金属準備と，上述の monied capital の形成・流通との関係をあきらかにしたことである。

現行『資本論』においても，当該部分の草稿においても，信用論の叙述は上記の論点をもって締めくくられる。一方での fictive なものへの拡散という信用制度展開の論理と，他方で「金」への収斂という通貨制度上の論理との固有の矛盾のなかで，貨幣資本蓄積論が展開されたのである。

3. 古典派流通論批判

〔1〕 古典経済学における流通の問題はスミスによって最も体系的に展開された。スミスは『国富論』第2編において再生産を農業と工業の間の素材的な補塡関係として示し，使用価値の相互的流通として資本の流通過程に初めて分析のメスを加えた。他方でスミスは，純収入の増大を図り，蓄積の円滑な展開が貨幣流通の無駄のない展開にかかるという見地から，「流通の大車輪」としての貨幣，即ち流通手段としての貨幣の機能に着目し，現金流通をいわゆる収入の流通部面に限り，他の流通部面を，信用によって代替される資本の流通部面として位置付けた。このような視点に立って，流通部面を二分し，いわゆる商人と商人との間の流通と，商人と消費者との間の流通とに分けた。この分化自体がスミスにおけるいま一つの再生産把握となっていることに注意が向けられるべきであろう。すなわちスミス固有の流通論の提示であった。ここでむしろ評価すべき点は，スミスが商人間流通を信用関係の唯一の展開領域とし，商人＝消費者間流通のみを現金流通の部面としたことである。周知のとおり，ここでの信用の機能は貨幣の節約であることは言うまでもない。スミスはこの節約規定を一貫して保持することによって，信用理論史のうえに画期的な転化をなしただけではない。同時にスミスは，重商主義のそれとはその意義を全く異にする貨幣蓄蔵の理論を展開することができた。かくてここでスミスが提起した問題は二重の意味を持つことになった。一つは，流通論の課題のなかに再生産と信用という信用把握の基本的な視座を埋め込むことができたこと。二つには，資本蓄積にとって貨幣形態における資本の果たす意義が流通次元の問題としても提

示されたこと，である。[14]

スミスの流通論は，いわゆる資本の流通過程論として展開されたものではなかった。というのも，かれにおいては資本の再生産過程における資本の一姿態としての貨幣資本の把握が欠如しているからである。かれの商人間流通の把握は最終実現部面を含まないにせよ，一つの循環を構成する流通部面である。にもかかわらず，この部面がすべて信用によって代替されると，そこから必然的に新たな流通部面が展開し，そこに流通する資本と再生産的な資本との区別が不明確となるからである。スミスはこの区別が重要であることを知っていたがゆえに，この新たな流通部面，即ち monied interest の活動領域に批判の目を向けたのである。しかし，理論的には信用と資本を混同するか，あるいはその区別を曖昧に残したのである。

〔2〕 マルクスは，1847年恐慌とそれが随伴した政治経済的なもろもろの事態が労働者による革命の現実性に道を開くものだという観測をもった。しかし実際には事態はかれが予想したようには展開しなかったが，かれはこのことから経済恐慌の分析が急務であることを学び，とりわけ通貨，金融にかんする情報の解析が当面する資本主義的生産の在りようを知るための避けて通れない道であることを認識し，研究を専らこの方面に集中した。このことは，1850年代初頭から中葉にかけての膨大な抜粋ノート，いわゆる『ロンドン・ノート』の作成につながったのである。[15] マルクスによるこの時期の抜粋作業はきわめて多方面にわたり，とりわけニューヨーク・トリビューン等への寄稿も加わり，外交問題，植民地問題，イギリス国内の経済問題に及ぶのであるが，中心をなしたものは恐慌期の通貨，金融問題にかんする諸文献からの抜粋であった。[16] これら抜粋はいかなる視点からなされたのであろうか。この点についてかれの考えを探る手掛かりとして1851年に書かれたとされる手稿『省察』について見てみたい。[17]

『ロンドン・ノート』と密接に関連するこの『省察』の基本的な性格は，それがマルクスによる初めての再生産過程の認識だということである。とりわけそれがスミスの先に見た流通二分論を基準として始められていることである。マルクスはこの議論をトゥックを介して提起する。

トゥックは1844年に刊行した『通貨原理の研究』においてスミスを踏襲してこの論点を以下のように展開する。

「商人と商人との間の一切の取引——これは，生産者乃至輸入業者から製造業者その他の中間過程の諸段階を経て小売商人乃至輸出商人にいたる一切の販売を意味する——は資本の運動また

注（14） スミスの再生産論と流通論また流通二分論の再生産論的意義にかんしては，大友敏明「アダム・スミスの2つの経済循環——再生産と通貨・信用構造——」「三田学会雑誌」78巻4号，1985年を参照。

（15） 『ロンドン・ノート』の全容については，八柳良次郎「マルクス『ロンドン抜粋ノート』における貨幣・信用論」「研究年報経済学」（東北大）44巻1号，1982年を参照。

（16） 『ロンドン・ノート』の一部は，1985年に MEGA, IV 7 として公刊された。

（17） „Reflection" in: MEGA, I 10.

は移転に帰着するということ，これである。さて資本の移転は大多数の取引において，移転にさいしての貨幣の授受，すなわち銀行券または鋳貨——私の考えているのは具体的であって抽象的ではない——を必ずしも予想しないし，また事実上現実にそれを要求しもしない。[18]」

ここで明示されているように，トゥックにおいては商人間の取引はそれ自体として鋳貨を必要としない取引であって，鋳貨に代替するものによって十分補うことのできる領域である。無論ここでトゥックは商人間流通が信用によっておこなわれることを，現実の問題としても認めているのであるが，[19] この流通は紙券の登場することのない，いわば振替決済によって処理されるような流通である。かれはこれを資本の流通部面としているのである。従って残る商人と消費者との間の流通は，現金や銀行券の流通する部面であり，かれはこれを通貨の流通部面とし，一方の資本と他方の通貨というように流通を二分する。

『省察』におけるマルクスのこのスミス＝トゥックの流通二分論への関心は，資本の再生産における資本の流通と収入の流通を明確に区別することよりは，それらの関連を明らかにすることであった。だからマルクスはこの点をつぎのように整理する。

「しかしながら，欠けているのは，取引ならびに貨幣のこの二種類のもののあいだの，以下に述べるような関連である。[20]」

こうした視点からマルクスは，商人間流通と商人と消費者の間の流通との制約関係を分析するのだが，かれの分析は一面でスミスのように商人＝消費者間流通の制約性を強調し，他面では商人間流通の規定性を強調している。このことは一見矛盾しているようであるが，マルクスの真意は，流通の基本的な機能が資本の再生産の循環的な経過を保証する局面が資本と収入との交換にあることを明らかにすることにあったのである。このことにおいてマルクスは，スミスをもトゥックをも超えていた。

マルクスはこれを貨幣に関連して次のように述べる。

「それ（貨幣……飯田）は取引のこの二つの別種の形態のなかに，本来の商業における通貨，および所得と諸商品，すなわち資本諸部分との交換における通貨として，見出されるのであるが，この両者間の分離を確認するのでは十分ではないのであって，それらの関連および交互作用もまた問題なのである。[21]」

ここには明示的ではないにせよ後の再生産における流通の三大区分への視点が見られるだけではなく，資本と貨幣の区別のための基本的な視座も設定されている。この区別の問題すなわち古典派流通論のなかにこの区別問題を確認することこそ，マルクスにとって信用論の形成へ向けての一契

注 (18) Th. Tooke, An Inquiry into the Currency Principle 1844, p. 35～6. 邦訳玉野井芳郎訳『通貨原理の研究』78ページ。

(19) 「銀行および信用の操作」(78ページ) を重視する。

(20) MEGA I. 10 S. 503.

(21) a. a. O., S. 504.

機をなしたものなのである。

さきに挙げた『ロンドン・ノート』のトゥックおよびフラートンからの抜粋においてマルクスは主として紙券通貨の還流性に関心を集中させていた。[22] このことは，マルクスがたんに貨幣の流通に注意を集中しただけでなく，貨幣流通と信用貨幣流通すなわち信用関係とのからみあいと両者の差異を析出しようと意図していたことをしめしている。

『ロンドン・ノート』における抜粋とともに『省察』におけるマルクス信用論の意義は，すでにここでマルクスが古典派以来の信用論を超克する視点をつかみとったことにあるといってよいであろう。それは信用と再生産過程の関連を明確にして，そのうえに流通領域としての金融流通の独自性をも併せて説明しようとしたことにある。すでにこれは一面，利子生み資本の運動を消極的にも積極的にも貨幣流通にかかわらせてとらえようとする古典派信用論への批判であったといえよう。

4. 流通論の形成と信用論

〔1〕 50年代のマルクスの信用論展開に重要な画期となるのは『経済学批判要綱』である。『経済学批判要綱』は，まず貨幣を「果実生み資本」につなげる論理を明らかにする意図を示して，貨幣と貨幣資本の差異を明確にしただけでなく，貨幣流通に媒介される資本の流通過程が信用の資本主義的基礎であることを明らかにし，信用の「基本規定」としてそれを示した。別の機会に明らかにしたように，[23] 流通時間，資本の回転と剰余価値の関連を明確にして，この見地から生産の連続性のみならず，流通の連続性を強調することで，「実現」と信用との関係が捉えられたこと。さらに流通時間の貨幣的契機として流通が貨幣を創出する契機を見た。単純流通の媒介ないし構成要因としての貨幣，したがって節約の対象としての貨幣，流通から自立する契機を内包した貨幣。貨幣のこの三様の規定が，再生産の流通過程的側面から，統一的に把握されたのである。すでにここには『資本論』段階においてはっきりと区別される Geld, Geldkapital, monied capital のそれぞれに対応するものがある。

いまひとつ『経済学批判要綱』においてマルクスが信用の基本規定として強調したのは，資本所有の量的制限の打破なる視点であった。ここでは資本蓄積への信用の積極的関与が示唆され，それに伴う fictive な資本の創造への一般的な傾向が指摘された。量的制限の打破は種々異なった水準において論じることができるが，それらのどの水準をとるにせよ，それぞれが擬制的なものの創出の契機になりうることを示して，独自な金融流通の展開への方向を指示したものだといってよいであろう。こうした契機はおよそ古典派の信用論が積極的には論じえない点であったといえよう。い

注（22） 例えば MEGA IV 7 S. 411.

（23） 拙著『信用論と擬制資本』1971年，第2章を参照されたい。

わゆる「スミスの原理」への一定の評価のうえに展開する古典派の信用論は，リカードに見るように銀行による貨幣資本——これは明らかに monied capital である——の社会的な配分，あるいはトゥック等の銀行主義者のように貨幣が同時に利子生み資本であると見るか，にとどまらざるをえないのであって，擬制的なものによる monied capital の蓄積と独自な流通領域の措定には到底行き着くことができなかったからである。『経済学批判要綱』がすでにこうした視点を提示しえていることは，50年代のマルクスの信用論研究の到達点を如実に示すものである。

『経済学批判要綱』は先に述べたように，貨幣によって始められ貨幣的な表象をとる果実生み資本で一応の締めくくりがなされるような構造になっていた。まさに貨幣とそれの運動の諸局面すなわち流通の諸形態こそ，剰余価値の生産および再生産過程の分析と並んで，『経済学批判要綱』における主要な指導動機であった。このことから貨幣資本循環の把握が貨幣と資本とをつなぐ基本的な環となっていることが明らかになるであろう。

〔2〕 マルクスの信用論を古典派のそれから区別するものは，マルクスが信用を一つの独自な流通領域として把握し，それを「金融流通」ないし金融市場の展開として経済学批判体系のうちに積極的に位置付けたことによるのであり，[(24)] それによって資本の物象化構造の全体が示されるものであった。こうした課題を遂行するために，物象化の形態規定的な起点としての単純流通からはじめて，資本の展開する流通過程を基礎に，改めて金融流通を措定しなおさねばならない。いな，新たに金融流通をこれまでの流通の次元とは異なった次元において措定することが必要であった。

周知のとおり，『経済学批判要綱』においては全体が一般的序説，資本の生産過程，資本の流通過程，果実生み資本から構成されている。資本の流通過程においてはすでに再生産論の萌芽さえ見いだされる。しかしそこにはなお流通過程論のための全体的契機となりうるような貨幣資本循環の視座は，貨幣流通ないし貨幣の諸規定の展開に隠れて明瞭には問題として措定されるに至っていない。換言すれば，貨幣と果実生み資本すなわち monied capital との区別はなしえても，貨幣と Geldkapital との区別をなすための理論的契機はなお存在していなかったといってよいであろう。『要綱』のこのような限界の拠ってきたるところは，つぎのようなことであったといえよう。『要綱』においては，先にわれわれが示したその基本的な構成原理としての貨幣の問題のほかに，なおいまひとつ重要な枠組として単純流通なる還元基が存在していることを指摘せねばならない。単純流通なる概念はここではブルジョア社会の内的構成の最も基本的な側面であり，その社会における諸個人の基本関係すなわち諸個人の物象的依存関係の形態的特徴を表現するものであった。人格的依存の関係と物象的依存関係との鋭い対比に全体系展開の基本的な契機をもとめたマルクスにとっ

注 (24) 『要綱』にはすでにこれについての明瞭なパースペクティヴが見られる。例えば S. 186. これについては，拙稿「金融市場」(『資本論体系 6』1985所収) を参照されたい。

ては，単純流通はこれら二関係の結接点としての意味を持つものであった。

Geldkapital と monied capital の区別は，貨幣資本循環の視座が据えられて初めて自覚的になしうるものであった。この点にこそマルクスによる古典派信用論克服への真の出発点があった。いいかえれば「資本の流通過程」論の成立こそこの作業にとって不可欠の前提であった。この課題は1861—63年の23冊からなる膨大なノートを通じて徐々に達成されてゆくことになる。

1861年にマルクスはこの「1861～63年草稿」の内容構成を決定するようなプランを作成している。そこには，「資本の流通過程」は明瞭に「資本一般」の第II部として位置づけられているが，第I部，第III部に劣らない詳細な内容上の指示がなされている。ところがこの草稿において主として展開されるのは，第I部と第III部「資本と利潤」であって，「資本の流通過程」論についてのマルクスの展開は，内容的にはほとんどなされていないというのが通説である。(25)

最近の「1861～63年草稿」の研究上の重要な問題の一つは，ノート XVI～XVII が，MEGA II 3/5 の編集者の意図どおりノートの番号順に時間的にも配列されうるか否かというこの草稿の執筆時期にかかわる論点である。

この問題は一面では，文献考証的な問題ではあるが，他面，この61～63年草稿の理論的性格の如何を問う重要な問題でもある。とりわけ，ここでわれわれが取扱おうとする課題との関連においては，看過すべからざる論点を含んでいる。ノート XVI～XVII すなわちさきに言及したプランの第III部「資本と利潤」の内容を含む部分が，ノートVに引きつづいて，すなわちいわゆる『剰余価値にかんする諸理論』(MEGA II 3/3) に先き立って執筆された部分であるとすると，ノート XV とノート XVII とはひとまとまりの部分を成すと推測することができるようになる。それのみか，ノート XV における，草稿「収入とその諸源泉」と，それ以降の展開とに連続性を想定することができ，これを単なる「補論」の地位に止める必要もなくなるという帰結を生ずる。それのみか，カウツキー以来，『剰余価値学説史』の編集が暗黙のうちに継承してきた『学説史』の結尾部分の構成にかんしても疑問を投げかけることとなり，引いては，『剰余価値学説史』全体の評価にかかわる問題に発展することになる。

結論を先取りする形で敢えて述べるならば，草稿『剰余価値にかんする諸理論』は，61年プランの第I部の展開と並行し，かつ，絡まりながら構想され，プランの項目展開を考慮に入れつつ執筆されていったと考えるべきであって，したがって，プランの第III部への展開が『諸理論』の展開にも一定の方向を与えていったものだと見てよいように思う。『諸理論』にしたがって，どこからどこまでと，明確にその範囲を確定しうるようなものではないと考えるべきであろう。この草稿のノートXVIII等で『諸理論』のつづきが現われるのも，こうした点に規定されたうえでのことであっ

注（25）例えば原伸子「『1861-63年草稿』における資本蓄積論—MEGA，II 3/6について—」「経済志林」50，1983を参照せよ。

たといってよいであろう。

MEGA の当該部分について検討の余地があることが容認されると，上記のとおり，ノートXV から XVII にかけての部分の性格は，理論的にいかに把握しうるのであろうか。

この論点の検討は，61～63年草稿が，61年プランに明示された「資本の流通過程」の項目にいかにアプローチしようとしていたかを見ることにも通じる。換言すれば，この草稿において，流通過程論はいかに展開されることになっていたのであろうか。

『学説史』の「流通過程」論史上に占める位置は，「資本の流通過程」が，現行『資本論』第 II 部がそうであるような，いわゆる再生産論の形成史の一つの画期をなしているということによって示されている。周知のとおり，マルクスは，すでに考察した50年代の『省察』においても明らかにしているように，固有の再生産論的視座を獲得していたが，この視座は『要綱』においては，発展といわれるほどの進展を見せることなく，問題として留保されて，60年代にいたった。その理由の一つは，何よりも，流通において果たす貨幣の役割について，立ち入った分析がなされていなかったこと，換言すれば，貨幣は単純流通の後半の契機 $G—W$ の側から分析されるにとどまっていたこと，貨幣蓄蔵の機能転換への契機となる，流通資本形態としての G の把握が不十分であったこと等に求めることができよう。さらに他の側面としては，「貨幣の資本化」の論理の展開の不十分性，すなわち，環元基としての単純流通がつねに基準とされることによる，$G—W—G'$ 形式への固有の矛盾をはらんだ移行，すなわち，$W—G—W$ に対立するものとしての $G—W—G$ 形式の措定がなしえなかったことにも，その理由の一つを探ることができよう。(26)

このような情況にたいして，60年代のマルクスにとっては，学説史的にはスミスのみならず，F. ケネーが分析の視野のなかに登場したこととあいまって，ケネーの「経済表」に即して言うならば，生産階級の年前払いの年々の回収・補塡と，不生産階級の消費部分の再生産の全構造が検討の対象とされるにいたったことをあげておかねばならない。61～63年草稿ノートX（MEGA II, 3/3）において，マルクスは，スミス再生産論に対して検討を加え，再生産過程が資本と資本との交換と，資本と収入との交換，さらに収入と収入との交換という三つの流れから構成されることを明らかにしただけではなく，ケネー経済表の分析を通じて，これらの一連の交換と貨幣流通の連関へ関心を集中している。すなわちここでは，素材補塡と価値補塡の並行的展開が貨幣による媒介で，貨幣流通の展開として示されることを明らかにし，再生産過程に即した貨幣の還流の基本的態様が明らかにされた。さらには，貨幣の流通資本・Geldkapital としての形態規定も明確になされたといってよいであろう。

いまひとつの契機として注意されるべきことは，61～63年草稿ノートI～Vにかけての「資本の

注（26） 61～63年草稿ににおける「貨幣の資本化」論については，原伸子「『経済学手稿（1861-63年）』における「貨幣の資本への転化」」「経済論究」44，1979を参照せよ。

生産過程」の分析に，一貫して，「貨幣の資本化」の論理が保持されていることである。

ノートI～Vにおける「貨幣の資本化」論において特徴的なことは，$G—W—G$をして積極的に資本の運動としてとらえ，運動の起点としてのGについて，つぎのように規定する。

「この運動を経過する貨幣は，資本である。言い換えれば，この過程を経過する，貨幣において自立化した価値は，資本がまず自己を表示する，あるいは現象する，形態なのである。」[27]

このような規定を基準として，「資本のもう一つの形態は，同様に非常に古いものであり，また通俗的な見解はこの形態から自分の資本概念をつくりあげたのであるが，それは利子を得るために貸し付けられる貨幣の形態であり，利子生み貨幣資本の形態である。」[28]として，運動としての$G—W—G$に代って結果としての$G—G$をあげ，これに関連して，「利子生み資本」にかんする要領を得た規定がすでに与えられている。[29]

このことに徴して見るならば，資本の流通形態へのマルクスの関心が，ここでは『要綱』におけるよりはるかに整理された形で表出されているといってよい。すなわち「流通のなかで自己を維持する交換価値」として資本を措定したとき，すでにそこに Geldkapital と monied capital の二つの規定が包括されるものであることが明らかにされて，事実上，たんなる Geld と対比される Geldkapital の主導的な役割が析出されていたのである。このような意味で，「貨幣の資本化」論は，たんに「資本の生産過程」論の前提であったにとどまらず，「流通過程」論への固有の契機ともなりえたといってよいであろう。

〔3〕 61—63年草稿を構成するノートXVからXVIIにかけては，一つの共通する課題が追求されていると解釈しうる余地があること，さきに指摘したとおりであるが，そこでの課題，ないし一貫するテーマとはなになのか。それは，端的にいえば「資本の流通過程」論とくに貨幣資本循環論への「下向」の素材としての利子生み資本（ノートXV，XVIII），商業資本（ノートXV，XVII），貨幣取扱い資本（同前）が，「流通過程」論への下向を一つの目標として理論的に析出されているということなのである。そしてこれらの素材の理論的再構成はノートXVIIIの貨幣の還流運動にかんする「エピソード」によって一応の総括をえ，さらにはノートXXIにおける「経済表」の成立へと至るものなのである。この分析過程全体の出発点は，ノートXVに所収する「補録　収入とその諸源泉」に求められる。[30]

注（27） MEGA, II 3・4, S. 9, 邦訳9ページ。

（28） a. a. O., S. 25, 邦訳40ページ。

（29） a. a. O., s. 26. ここでマルクスは，G……Gとして資本となる，すなわち貨幣が貨幣を生むようなGをとりあげ，4つの属性を分析する。1. 貨幣が資本であること，独自な種類の商品であり，それによって資本として完成されていること。2. 資本の最初の現象形態であること。3. 消費のための貨幣の貸借は「現存する価値の異なった配分・移動」(a. a. O.) であること。4. 支払のための借り受け。資本の流通過程の行為であるかぎり，これの分析には信用論が必要であること。

「補録・収入とその諸源泉」については，従来これを『剰余価値学説史』の結尾として，いわゆる三位一体的範式批判として，現行『資本論』第Ⅲ部8篇との関連で理解されるか，あるいはマルクス信用論の形成史の観点から「利子生み資本」論の展開として，『学説史』における俗流経済学批判と関連させて理解されてきた。これらは一面でもちろんそれ相当の理由をもった理解であり，全面的にこれらを誤りとするわけにはゆかない。とはいえ，収入論という観点からしても，61～63年草稿が，古典経済学や俗流経済学の批判に三位一体的範式批判をなすのは，この箇処に限られるわけではない。ノート XXI に描かれた「経済表」も，その出発点には，収入論批判があることも想起されるべきであろう。

さらに，信用論史上の意義についていえば，すでに別の機会にのべたように，ここでの利子生み資本の展開には，信用と利子生み資本の関連いかんの問題がすでに提起されていて，単純に収入論の視野からの論究に，この点も限られない。

このように見てくると，ここでのマルクスの理論的パースペクティヴは，はるかに広範なものであると考えねばならない。それをいささか単純化して表現すれば，「完成された資本」としての利子生み資本の運動ないし流通様式 $G\cdots\cdots G'$ から $G—W—G'$ すなわち資本の一般的定式の中間段階に，貨幣資本の循環形式を措定することである。「利子生み貨幣資本」として完成される G がその完成への過程でいかなる形態をとりうるのかが同時に問題なのである。

このことに関連して，MEGA II 3/5においては，大要つぎのようにのべられている。再生産過程である資本の流通過程は，その第一段階は，単純流通の最終段階でもある $G—W$ であり，これによって生産過程が開始され，流通過程は中断される。ついで「生産過程または産業的消費によって中断される流通の第二の行為」(ibid) $W—G$ がなされ，貨幣は「自分自身に復帰」(ibid) する，と。さらに個別的生産過程（資本の循環）とはことなって，社会的な循環においては「生産と流通との連続性——資本主義的生産の本性によって規定された連続性は，個々の生産過程におけるのとは違った意味での，またはそれとは違った立場での，二つの流通行為を示す。個々の生産過程の場合には $G—W$ は，ただ，生産過程の開始（更新ではない）を表わす一流通行為にすぎず，また $W—G$ は，ただ生産過程の終わりを表わす一流通過程，したがってその再開を表わすことのない一流通過程にすぎない。それらを連続的なものとして，したがって流通過程と生産過程との流動する統一として見るならば，われわれは，通過点または終点として現われる点のどれからでも出発点として始めることができる。」[(31)]

このように，$G—W$，$W'—G\cdot G$，$P\cdots\cdots W'$ という3循環は，生産と流通の総再生産過程的

注 (30) 61～63年草稿のノートXVI についてはすでに本文中にふれたように，執筆時期にかんして問題が出されている。これをふまえて，ノートXVの「補録」以降の展開をみると，商業資本論を経て貨幣還流論＝再生産論へいたるという明白な経過を指摘することができる。

(31) a. a. O., S. 1479, 邦訳 449-450ページ。

な連続性の観点から「流通する統一」の断面をみたものであり，これと「個々の生産過程」の第一の行為との綜合として，「資本の流通過程」したがって資本の再生産過程が貨幣資本（Geldkapital）の循環から開始されることが明確に定礎されたのである。「完成された資本」が流通過程と生産過程との統一された全体として現われるなら，「流通過程」こそその前提でなければならず，したがって，信用が解明されるには，不可避的に「資本の流通過程」論の展開がなされねばならない。これが61～63年草稿段階のマルクスの基本的視座であった。では上述のような流通過程論と信用論の接点にはいかなる問題があるのであろうか。

〔4〕 61～63年草稿における信用論は，いうまでもなく「資本一般」の範囲内の展開にとどまり，したがって，産業資本＝生産的資本に対する流通資本の措定としての利子生み資本との関連において把握されているにすぎない。しかし，基本的には利子生み資本がとる資本主義的に特有な形態として，信用が把握された。しかしこのことは『要綱』の段階の果実生み資本の展開が信用と無関係になされていたことと比べ，信用把握に大きな前進をもたらしたものといってよいであろう。

利子生み資本と信用との関連を，「資本の一部分が――貨幣資本の形態で――実際に，この階級全体によって操作される共同の材料として現われる。これは信用の一つの意義である。」[32] という記述にみられるように，階級共同の資本として理解し，別の処ではつぎのようにのべている。

「他方，貨幣資本（貨幣市場における資本）は，それが共同的要素として，その特殊な充用には無関心に，種々の部面のあいだに，資本家階級のあいだに，それぞれの特殊な部面の生活上の要求に応じて配分されるさいにとる姿を，現実にもっている。さらにまた，大工業の発展につれて，ますます貨幣資本に，それが市場に現われるかぎりでは，個々の資本家によっては代表されなくなり，すなわち市場にある資本のあれこれの細片の所有者によっては代表されなくなり，むしろ集中され組織されて，現実の生産とはまったく別の仕方で，資本を代表する銀行家たちの管理〔として〕現われる。したがってまた，需要の形態について言えば，この資本には一階級の重みが相対している。しかし，供給について言えば，この資本は，一団になった貸付可能資本として，わずかばかりの貯水槽に集積された社会の貸付可能な資本として，現われる。」[33]

「銀行家たちの管理〔として〕現われ」，「一団になった貸付可能資本」である利子生み資本は，たんなる貨幣形態をとる資本の総体を意味しているのではなく，貸付可能なものとして個別資本の手を離れた，階級共同の資本としての貨幣資本として，monied capital として現われるのである。マルクスは，このような資本の形成を，「信用の意義」のうちに数えるのであるが，この「意義」は，現行『資本論』第3部第5篇第27章で，「役割」としているものに相当する。これにつづいて

注 (32) a. a. O., S. 1515.
(33) a. a. O., S. 1463.

マルクスは信用の意義をさらに展開し，「流通過程」の諸変態の短縮，さらに「蓄積するという機能」に，この意義を求めている。ここでも信用が独自の流通領域を形成するものとされているが，それはいわゆる資本の流通過程から明白に区別されている。これらの「信用の意義」は，現行版の第27章に対応して，monied capital の蓄積過程の解明に収斂されるものであれば，現行版第5篇の全体の課題にもそれは大きな影響を与えるものだといってよいであろう。

ところが，61～63年草稿においては，『要綱』において明示された「信用の基本規定」，とくに流通時間の短縮なる視点は，ほとんど検討の対象とされていない。この間にいったいいかなる発展があったのであろうか。このことの解明は，まさに，61～63年草稿において，第II部「資本の流通過程」がいかに扱われるものであったかが問われねばならない。ところが，ここにおいては，さきの「信用の意義」の措定においてあきらかにされているように，流通時間の短縮は，信用の意義のなかに明確に位置づけられながらも，利潤率の均等化の媒介についてあげられており，「資本の流通過程」についても，いわゆる個別諸資本の対抗によって形成される独自な流通の過程を基盤として，そこから抽象されるべきものという位置づけになっている。すなわち，諸資本の競争から，社会総資本的流通へ下向する中で論点が提示されているにとどまる。

これについては，二つのことが指摘されねばならない。一つは，61～63年草稿ノートXVIIIにおける「再生産過程における貨幣の還流運動」が，マルクスの「流通過程」論構想への大きな一歩であり，一面では再生産と貨幣流通の問題を，スミス＝トゥークの「流通二分論」に依りつつ，他面，いわゆる商人間流通と商人・消費者間流通，すなわち第I部門（生産財生産部門）の $v+m$ と第II部門の c との間の交換を視野に入れることによって，金貨幣（現金通貨）の流通を前提に，貨幣還流法則の解明のいっそうの深化を意図するのである。さらに二つには，いわゆる蓄蔵貨幣第2形態が，貨幣取扱資本の機能およびその独自の運動に関連して析出されていることである。これによって資本の流通過程から排出される貨幣・貨幣資本の基本規定が与えられ，蓄蔵貨幣第2形態に即した節約構造が monied capital の蓄積とその特異な流通部面の形成として明らかにされたのである。ノートXVにおいてマルクスは，これに一般的に利子生み資本なる規定を与えていることは注目されてよいであろう。

かくして，「信用」にかんするまとまった論述を欠いているとは言え，61～63年草稿においてマルクスは信用による節約の重層的構造を明らかにしえた。資本の流通過程の時間的契機に即した貨幣節約と，貨幣的契機に即した monied capital の蓄積・流通の措定がそれである。このような構造は，現行『資本論』第5篇のみならず，第II部の展開のうちにも受け継がれている。それによって，この節約の重層構造は，信用論の課題を二分したことになる。そして第3部第5篇はもっぱら monied capital の蓄積，すなわち，金融市場に現象する利子率の変動の問題に収斂されたのである。

5. 小　結

スミスをはじめとする古典派信用論の積極的な論点は，一面では，現実資本の再生産にあくまで立脚して，信用論を展開したことである。他方，古典派にはいまひとつの信用を巡る論点があった。それは，シスモンディによって初めて明確に概念化の努力がなされた擬制資本の問題である。シスモンディは，これを想像的資本として銀行信用の展開のなかに位置づけたように，ここには原初的ながらも現実資本の蓄積にたいする貨幣資本の蓄積の独自性についての認識を読み取ることもできよう。マルクスの信用論の特徴の一つである擬制資本論の展開は，一見するところこのような学説史的背景のなかでなされたように思われるが，はたしてそうであろうか。

マルクス信用論の学史的な特徴を敢えて言うとすれば，古典派信用論のかかる二分された理解にたいして，再生産と信用という基本課題を自覚的に，かつ統一的に把握しいま一度問題そのものを建て直したところにあると言ってよいであろう。これについてのマルクスにおける最大の論点は，資本の流通過程における貨幣の役割について，いわゆる再生産表式論をも含めて，貨幣資本循環という視座から如何に理解しうるかという点であった。資本主義に固有な社会関係であり，それを前提とした諸価値の運動そのものである資本の把握を初期的な条件として，$G—G$なる運動過程が如何に自立してくるか，資本の一般的な運動株式がこれへの契機をどのように含んでいるのかを明らかにすることであった。貨幣資本循環視座が当初から Geld と Geldkapital の両性格を併せもっている貨幣を措定するのもこのためであった。

信用論の展開にとって，このことはどのように作用したのであろうか。

マルクスの信用論を構成する基本的な範疇として，従来から容認されてきたものは，商業信用と銀行信用であった。ところが，商業信用の銀行信用による代位として示される関係は，たんに商業信用の限界の銀行信用による克服といったことをこえた内容をそれ自体のうちに提示するものであることに注意する必要がある。資本の流通様式から見ると，このことは $G—G$ と $G—W—G'$ との重なり合う関係が，それぞれに自立する契機が，信用のなかに求められるということである。したがって，$G—W$ や $W—G$ に立脚する商業信用とは成立の契機を根本的に異にする信用関係が措定されねばならないということを意味するであろう。「1861～63年草稿」においてマルクスが構想したものは，まさにこのことであった。いまひとつ重要な点として指摘しておかねばならないのは，個別資本的な信用の成立の要因にたいして，それを要因として共有しながらもそれを超えて社会的に階級共同の資本としてのみ存在しうるような資本，すなわち monied capital の措定を必然化する信用の形成である。これこそ銀行信用の商業信用代位の側面とともに第二の重要な側面であった。『資本論』におけるマルクスの信用論構築の主要な努力はまさにこのことに集中されたのである。

（経済学部教授）